

令和4年度 広島県立農業技術大学校評価シート（関係者評価）

重点目標	1 定員の確保	2 進路指導の充実	3 学生の学力・資質の向上
	4 カリキュラムの改善	5 職員のスキルアップ	

課題番号	課題	現状	評価項目	具体的方策	評価指標及び目標値	成果・達成実績	達成度	次年度の課題と改善策	関係者評価委員意見
1	定員の確保	・定員の充足率は、専修学校化以前（H17～H21 平均 定員 50 名/1 学年）は 42%。 専修学校化後（H24～R03 平均 定員 40 名/1 学年）は 74%となっている。 ・近年の入学者数 H29 22 名 H30 20 名 R01 29 名 R02 28 名 R03 27 名 R04 18 名	農業高校との連携	1 県内の農業高校 6 校との連携した取組について農業教育連絡協議会で協議する。これまでは、農業大学校 1 日研修と宿泊研修を実施してきたが、担い手育成に係る系統的な学習プログラムの見直しが必要である。農大における研修の実施を含めてワーキング会議で検討する。	1 農大の理解度向上 農大研修（1 日、宿泊）の改善を検討し、効果的な研修会を実施する。 2 回	1 農大の理解向上 ・今年度の農業教育連絡協議会では、これまで実施してきた農業分野の担い手育成に係る系統的な学習プログラムの見直しについて協議した。その結果、今年度の農大研修（1 日、宿泊）は実施しなかった。	D	次年度はオープンキャンパスの内容の充実を図り、農業高校生徒、保護者の参加を促す。	新型コロナによる行動制限の緩和に伴い、関連行事の実施にしっかり取り組んでほしい。
				2 農業高校との授業交流により大学校の認知度を向上する。	2 参加校、参加回数の向上 【農業高校→農大】 ・デュアルシステム 3 名 ・卒業論文公開発表会 参加農業高校 3 校 【農大→農業高校】 ・園芸装飾 1 回	2. 参加校、参加回数の向上 ・デュアルシステム（中止） ・卒業論文公開発表会 新型コロナウイルス感染症対策を図り、通常開催した（99 名参加）。 参加農業高校 2 校、42 名（R03 3 校） 【農大→農業高校】 日程が合わず実施ができなかった。	B	卒業論文公開発表会のリモート開催の併用は実施できなかった。次年度は農業高校の要望を把握したうえで併用開催を検討する。 農業高校での講義は新型コロナウイルス感染症の影響と日程調整が困難であり実施できなかった。次年度は対象科目について早めに調整を行う。	農業高校との交流は今後も重要である。継続した交流に努めてほしい。
		・農業高校からの進学者は 34.3%（H24～R03）。 H30 年度 55% R01 年度 41% R02 年度 43% R03 年度 41% R04 年度 50%	高校訪問	3 県内高校への訪問を早期に行い、大学校について、進路担当教諭の理解を深める。	3 高校訪問数 ・学生募集 105 校 ・高校ガイダンス参加 15 校	3 高校訪問数 ・学生募集 141 校（R03 142 校） ・高校ガイダンス参加 8 校（延べ 12 回） 昨年に引き続き県庁（農業技術課）の協力を得て、訪問高校数を増やして実施した。 また、就農応援フェア（広島）に 1 回、会場形式の進学相談会（呉、三次）に 2 回参加した。	A	今年度の高校訪問は県庁の支援を得ながら、教務課の職員全員が分担して取り組んだ。本年度に引き続き本庁の支援を得る。	大学校の PR のためには、高校訪問は非常に効果的である。今後も関係機関と連携して継続実施してほしい。
			情報の発信	4 ホームページの積極的な更新に努め、適時に大学校を紹介する。	4 ホームページの積極的情報更新 農大ニュース 24 件 学生ブログ 24 件	4 ホームページの積極的情報更新 農大ニュース 8 件 学生ブログ 20 件（12 月末で休止） SNS（Instagram など）24 件（9 月から開始） SNS による情報発信の検討 2 回	D	本年度から SNS（Instagram など）による情報発信を開始した。学生の参加も呼びかけ一層の充実を図る。HP の更新が少なかった。	HP は最も有効な情報発信手段である。こまめに情報更新を図ってほしい。 体験学習の様子を紹介してみたらどうか。
		H30～R04 は実数で 11 名/年。		5 オープンキャンパスの PR に努め、参加者数を増やす。	5 オープンキャンパス ・開催回数 2 回 ・参加者数 50 名 ・アンケートによる評価 「参考になった」100% 「希望コースがある」95%	5 オープンキャンパス ・開催回数 2 回+学校見学会 1 回 ・参加者数 71 名（R03 42 名） ・アンケートによる評価 「参考になった」98%（R03 98%） 「希望コースがある」98%（R03 97%） 学校見学会（11 月）の開催について高校に郵送やメールで周知した。 本校 HP からも申込みが行えるよう申込方法を改善した。	A	参加者の満足度の高いオープンキャンパスとなるようアンケートを基に内容の充実を図る。	新型コロナによる行動制限の緩和に伴い、より充実した内容で取り組んでほしい。

課題 番号	課題	現状	評価項目	具体的方策	評価指標及び目標値	成果・達成実績	達成度	次年度の課題と改善策	関係者評価委員意見
2	進路指導の充実	・農家出身の学生は入学生の中で 31%であるが、経営基盤が十分でなく、卒業後すぐの自営就農率は卒業生のうち 13%である。 (過去3年平均)	進路別対応の実施	1 就農就職促進会議で関係機関と連携を進めながら、農業法人、農業関連企業のガイダンスを開催し、学生の意識を高める。	1 農業法人等雇用就農ガイダンスの開催 ・ガイダンス参加企業数 20 社 (2 回延べ数) ・ガイダンスを通じた採用内定者数 4 名	1 農業法人等雇用就農ガイダンスの開催 ・ガイダンス参加企業数 11 社 (2 回延べ数) (R03 12 社) ・行事を通じた採用内定者数 3 名 (R03 0 名) ガイダンス参加企業へ 7 名が応募し、うち 3 名が内定を得た。	B	ガイダンスによるマッチング効果は大きいことから引き続きガイダンス参加企業の増加を図る。 短期インターシップの取り組みと合わせ 1 年生のガイダンス参加を継続する。	今後も様々な方法、内容で実施し、学生の法人就農を支援してほしい。 内定が得られなかった要因(評価のポイント等)について分析し、学生指導に活用してほしい。
		・農業法人等への就職就農は 53%であり、一定の雇用の受け皿になっている。自営就農・研修を含めた就農率は 72%に達した。 (過去 3 年平均)	進路の方向決定早期化	2 就農先として捉えた農家体験学習先を選定する。	2 就職希望農業法人等での研修 参加学生数 10 名 就農学生数 5 名	2 就職希望農業法人等での研修 参加学生数 10 名 就農学生数 6 名 10 名の学生が就職希望先 7 社で体験学習を行い、6 社に応募し内定を得た。	A	体験学習がインターシップとしての役割を果たしており効果大きい。引き続き体験学習先の選定は、専攻担当職員と連携を図りながら取り組む。	県内には学生のための良い研修環境が多くある。積極的に活用してほしい。 県指導農業士会を活用してほしい。
		・県農林水産局の関係各課とともに就農就職促進会議を組織し、各行事等を通じて学生の進路決定支援や情報提供を受けている。 ・市町 JA 等独自の研修制度等支援を受け、就農をめざす学生がいる。 ・進路の方向が定まらず、決定が遅れる学生が見られる。		3 個別面談を実施し、進路意向を把握するとともに、進路の早期決定への意識付けを図る。それぞれの学生に対し、個別の支援を継続的に行う。	3 個別面談 ・進路希望調査 各学年 2 回 ・一斉面談 各学年 2 回 ・採用試験エントリー支援 面接指導 30%(2 年生のうち指導した学生割合) 履歴書支援 70%(同上) ・個別のキャリアカウンセリングの実施 100%(同上) ・就農率 60% ・進路決定率 100%	3 個別面談 ・進路希望調査 1 年生 2 回 ・一斉面談 1 年生 1 回、2 年生 2 回 ・採用試験エントリー支援 面接指導 36%(2 年生のうち指導した学生割合) 履歴書支援 60%(同上) ・個別のキャリアカウンセリングの実施 100%(同上) ・就農率 80%(R03 82%) ・進路決定率 100%(R03 100%) ・企業経営体の育成が進み、求人が増加していること、進路決定ゼミや 1 年次の短期インターンシップによる意識付けが進んだことから、就農率は昨年に引き続き目標を大きく上回った。	A	次年度もキャリア指導班担当職員による進路面談において、丁寧な意向確認と本人希望を尊重した進路指導を継続して実施する。	卒業後、誰もがすぐに一人前になるわけではない。学生の進路指導はあせらず粘り強く行ってほしい。

課題 番号	課題	現状	評価項目	具体的方策	評価指標及び目標値	成果・達成実績	達成度	次年度の課題と改善策	関係者評価委員意見
3	学生の学力・資 質の向上	・資格取得へ向けたゼミを学生の希望による選択制で実施している。 ・進路先が求めている能力に対して、学生それぞれがレベルアップしていくことが求められている。 ・学生間の学力の差が大きく、主体的・意欲的に学習に取り組む学生がいる一方で、実習に必要な基礎的な計算力が不足している学生もいる。	資格取得の促進	1 学生のニーズに対応したゼミの開催により、資格取得を支援する。	1 各資格の取得目標（過去 3 年間の合格率の平均） 大型特殊免許 95% けん引免許 90% フォークリフト技能講習 94% 危険物取扱者（乙 4） 15% 毒物劇物取扱者 44% 小型車両系特別教育 100% ガス溶接技能講習 100% アーク溶接特別教育 98% 農業機械士 86% 日本農業技術検定 2 級 30% 農業簿記検定 3 級 28% 家畜商講習 100% 園芸装飾 3 級 90% 家畜人工授精師 97%	1 各資格取得実績 大型特殊免許 88%（16/18） けん引免許 85%（6/7） フォークリフト技能講習 100%（21/21） 危険物取扱者（乙 4） 30%（3/10） 毒物劇物取扱者 15%（2/13） 小型車両系特別教育 100%（14/14） ガス溶接技能講習 100%（18/18） アーク溶接特別教育 100%（18/18） 農業機械士 94%（16/17） 日本農業技術検定 2 級 32%（8/25） 農業簿記検定 3 級 26%（5/19） 家畜商講習（R5 年度講習予定） — 園芸装飾 3 級 50%（3/6） 家畜人工授精師 66%（4/6）	C	大型特殊、けん引は目標未達成であった。危険物（乙 4）の合格率が目標を上回ったものの、毒劇物の合格率が未達成であった。年度によって合格率に差があるため、資格取得の意義と目的を明確にし、合格率の向上と安定を図る。	学生一人一人がしっかり自己研鑽を積んでほしい。 農業現場での大特およびけん引免許の重要性が増している。 危険物（乙 4）、毒劇物の取得実績が低い。合格率向上に努めてほしい。 鳥獣害対策のため、狩猟免許（罟猟）資格を加えてはどうか。 農業簿記の基礎を理解することは将来の就農に向けて必須である。 B/S を読める水準を目指してほしい。
		・生活態度は全体的に良くなっているが、細かい点の改善が必要である。	主体性・規律性の向上	2 学生が学習に意欲を持って取り組めるようカリキュラムを進める。	2 単位取得率 97.5%（過去 3 年平均）	2 単位取得率 96.5% ・単位取得率は、高い水準を維持している。	A	1 年生については、令和 4 年度の成績をもとに農力獲得チャートを作成し、新学期の個別面談により、2 年時の学習意欲向上につなげる。	
				3 生活指導監と連携した指導により、学生の主体的な取り組みを促すよう指導を行う。	3 寮生活での改善状況 ・寮委員の主体的な動きをつくる ・掃除当番の確実な実施による共有部分の整理整頓 ・生活時間の順守 ・生活指導監講話の開催	3 寮生活での改善状況 ・掃除当番については、生活委員が主体となった当番表の作成と変更のルールが定着しており、確実な実施とともに各自の責任感の向上にもつながった。 ・生活時間の順守については、門限や入浴時間など概ね守られたが、外泊届や外出届に記入した帰寮時間が守られていないケースがあった。 ・生活指導監講話の開催 生活指導監講話を 2 回開催し、職員も同席して情報共有した。	A	寮内でのあいさつの励行やスマートフォンの利用方法について課題がある。学生寮役員や生活指導との連携を密に課題解決を図る。	適切なスマートフォンの使用方法を指導することが大切ではないか。 寮内の掃除が行き届いている。 寮生の様子から充実した寮生活を送れていることがうかがえる。

課題 番号	課題	現状	評価項目	具体的方策	評価指標及び目標値	成果・達成実績	達成度	次年度の課題と改善策	関係者評価委員意見
4	カリキュラムの改善	・平成28年度から、独立就農を希望する学生を支援する農業経営体で長期研修を行う就農実践専攻を設置し、就農を促進する。 ・学生の能力に応じた選択科目を加えたカリキュラムを実施する。	新たな専攻設置と新カリキュラムの策定	1 就農実践専攻の円滑な運営	1 学生への周知、意向確認、受入経営体との調整等スケジュールに基づいた実施	1 野菜・花きコースの1年生を対象に入学時と専攻決定時の2回、就農実践専攻について説明会を開催した。希望学生については個別に面談することで意向確認を行った。就農実践専攻を希望する学生を1名確保できた。また、1年次での受け入れ経営体での研修も円滑に実施できた。 2 年生(2名)の受け入れ経営体での先進経営体実習は順調に実施できた。受け入れ経営体での就職は実現しなかったが、農業法人への就職につながった。	A	専攻学生の受け入れ経営体への就職が進んでいない。受け入れ経営体とのマッチングや選定基準について検討する。また、就農実践専攻1名の2年次の長期研修について受け入れ経営体との調整等スケジュールに基づいた実施を進める。	
				2 選択科目の適切な運用 卒業論文Ⅰ、Ⅱ プロジェクト学習 模擬経営実習	2 選択科目の実施	2 1 年生を対象に卒業論文の選択について説明会を開催した。PJ 学習と模擬経営実習について学生の理解がすすむよう丁寧な説明に努めた。専攻担当職員により意向確認を行ったが、本年度は模擬経営実習を選択した学生はいなかった。 また、本年度の模擬経営実習に取り組んだ学生2名については、庄原市での自営就農(キク)と継続研修(キク)を予定している。	B	卒業後すぐに就農を予定している学生の場合の実習品目の選定を慎重に検討すべきであった。 就農意欲の高い学生に対して、積極的なアプローチにより実習学生の確保を図る。	学校施設のみの実習では限界がある。農業法人等の協力を得て大きな規模を体験させてほしい。 スマート農業関係のカリキュラム導入について、学校評価項目に加えたらどうか。
5	職員のスキルアップ	・職員が授業や生活指導上の問題に効果的・効率的に対応できるようスキルアップのための取り組みが必要である。	研修への参加	1 各種研修への積極的な参加を呼び掛ける。	1 県内外で開催される研修への参加者数 9 名 2 教育委員会の新任研修へ参加 3 名	1. 研修への参加者 ・アクティブラーニング研修(校内開催)3 回 参加者延べ 32 名 ・西日本ブロック部門別研修、中四国ブロック教務研修(書面開催など) ・民間業者の実施する農大教員向け Web 研修 参加者 12 名 ・JGAP 指導員研修 1 名 ・職業紹介責任者講習 2 名 .教育委員会の新任者研修への参加 3 名 農林水産省が主催する畜産技術研修への参加 1 名	B	本年度も新型コロナウイルス感染症のため他県の農大との対面での情報交換ができなかった。 本年度受講したアクティブラーニング研修を参考に次年度のカリキュラムに部分導入する。 リモート研修を含め積極的な研修受講をすすめ、スキルアップに努める。	各種研修に積極的に参加することで職員のスキルアップに努めてほしい。 県指導農業士会主催の研修会を活用してほしい。

評価基準(達成度)

A	90%以上の達成
B	75～89%の達成
C	60～74%の達成
D	45～59%の達成
E	45%未満の達成